

論文の内容の要旨

論文題目 多施設共同データベースを活用した周産期の診療に資するデータ分析

氏名 森崎菜穂

小児医学の最終目標は子どもの健康を守り、推進することであり、そのためには医学的に適切な介入方法を、継続的に模索していく必要がある。近年、多くの先進国における厳しい財政的環境もあり、このような介入方法に関して、科学的根拠に基づき、客観的な評価を行うことで、より強固な根拠を持つ方法を優先的に導入することが求められるようになってきている。このためには、適切な介入研究を施行し、その結果に基づいて医学的介入が導入されることが基本である。一方、必要とされる介入研究にかかわる人的・経済的資源が増大する現在、このように介入研究を活用して診療を進歩させることの限界が議論されるなか、診療行為を反映するさまざまなデータを最大限に活用することの重要性が認識されてきている。

そこで、本研究では、母子医療分野において近年増加を認める低出生体重や双胎妊娠に関わる課題を取り上げ、全国新生児臨床研究ネットワークのデータベースおよび日本産科婦人科学会周産期登録データベースの二つの多施設共同データベースを用いて、日本の周産期診療の課題に関するデータ分析を行った。

まず、第一章においては、日本の新生児医療界が推進してきた極低出生体重児に関する急性期の診療および長期予後に関する既存の疾病登録データである、全国新生児臨床研究ネットワークのデータベースを用いて、極低出生体重児の栄養方法と成長の関連性（第一章 A）、そして成長と長期の神経学的発達の関連性（第一章 B）を検討するデータ分析を行った。その結果、生後2週間未満に経腸栄養が確立可能な極低出生体重児においても中心静脈栄養の併用は児の頭囲・身長・体重増加を有意に増やし、また入院日数を有意に減らすこと、さらに、NICU内・退院後から3歳までの頭囲成長は3歳時点での神経発達に有益であることを認めた。

次に、第2章においては、日本の全分娩の約16%について詳細な母子情報を収集している日本最大の周産期データベースである日本産科婦人科学会周産期登録データベースを用いて、胎内一児死亡双胎における膜性と予後の関連性を検討するデータ分析を行った。この研究では、妊娠中の詳細な情報と新生児の予後をともに必要としたため、周産期登録データベースを人口動態統計と連結することで、より大きな母集団を用いた解析を行った。その結果、胎内一児死亡を起こした二絨毛膜双胎と比較して、一絨毛膜双胎は、早産率は変わらないが生産児の乳児死亡率が有意に高いことを示した。

本研究の以上の検討結果は、よりよい母子医療を実現するために解決すべき課題に関し、診療の質向上に貢献するものと考えられる。